



[令和 2 年 1 月 8 日 定例会発表要旨]

道路にまつわる話

手稲郷土史研究会 会員（副会長） 立花 邦雄

私は札幌の道路に関わるようになってから 30 有余年の間、“みちづくり”とその維持管理に携わってきたが、歴史をたどると 1869 年、開拓使の島義勇判官が札幌市街の区画割を決めたということが、実に意義深い。札幌市が碁盤の目状の道路区画になっている そもそもの出発点である。

私はこの道路形態が好きである。交差点が多すぎると批判する人もいるが、札幌市内を車で走っているとき、条丁目表示で住所がすぐわかるため

目的地の予想が大体頭に浮かぶではないか。これは、東京などで目的地を探すときの苦勞の何分の一かである。札幌のまちのこの形態を大事にしたい。

もちろん 幹線道路網といわれる 拠点から拠点を結ぶ広域道路網は 碁盤の目という訳にはいかないが、これまで何次かにわたって計画され、また整備されてきており、郊外へもほとんど支障なく行き来できるようになった。これは、1972 年に開催された『札幌冬季オリンピック大会』以来、札幌が道路投資を積極的に行ってきた結果である。

手稲に目を移すと、開拓当時は小樽港を基点に軽川や サンタロペツ（現在の富丘）が札幌への陸上輸送の中継点になっていたようで、当時の賑わいが目に浮かぶようである。この手稲にも 4,000 年の歴史があり、近年、土器や遺跡が発掘されていることから まだまだ研究する価値があると思う。

歴史にまつわるエピソードとして忘れてならないのは、「東宮駐輦記」碑の件であろう。2013 年 2 月、手稲郷土史研究会の H 会員が、再開発のため廃棄土砂と共に処分されようとする 破損した石碑を偶然発見。会では 茂内前会長を中心にすぐプロジェクトチームを立ち上げ、保存のため奔走した。その結果、各方面の協力を得て『前田公園』に復元設置され、現在に至っている。興味のない人にとって古い遺物は、ともすれば廃棄される運命にある。大切なのは「これは残すべきで放っておけない」と考える 発見者の意識と、保存しようとする関係者の熱意である。公園に鎮座する石碑を見るとき、我々はこの気持ちを大切にすべきだと考えるものである。

さて、私が手稲で興味ある道路の一つは、その『前田公園』が接する「道道 石狩手稲線」である。



二代目 手稲駅（旧軽川駅）
— 1934 年に建てられた山小屋風の駅舎 —

この道路は「石狩街道」ともいわれており、石狩市と手稲を結ぶ幹線道路であるが、その昔、除雪で苦勞した思い出がある。現在は建物がたち 地域の状況も変わっているが、以前は何もない雑草地で吹きだまりが出来やすく、一晩に何回も除雪車が走らなければ交通止めになってしまう状況であった。

しかし、この道路に昔、軽川駅（現在の手稲駅）から石狩の花畔まで「馬車鉄道」（軽石軌道）が走っていたという話は驚きに値する。それも、札幌市内を走っていた馬鉄の払い下げ車両であったというから、なんとなくユーモラスである。



札幌冬季オリンピック大会の遺構
—手稲山で行われた競技の運営本部だった—

とはいえ、手稲は「テイネイ＝湿った土地」というくらい地盤が悪いところが多かった。案の定、相当に苦勞したらしく、結局、採算が合わず無くなってしまったとか。

手稲駅の近くに「手稲駅裏通り線」という道路がある。『西友』の脇を走っており、現在、「石狩手稲線」は鉄道横断の箇所で大きくカーブしているが、本来この道路に載せれば直線にできたのに、そうっていない。これは謎である。

もう一つ、「手稲山麓線」という道路がある。これは『札幌冬季オリンピック大会』のときに整備した道路である。

この道路を上っていくと、やがて見えてくるのは当時、大会で使用した施設の遺構である。競技を支えた運営本部も今は残骸と化し、実にかわいそうで見られない。2030年には、うまくいけば再びこの場所で冬のオリンピック大会が開催されるかもしれない。そのときには、これらの施設を再整備して、ぜひとも生き返らせて欲しいものである。

このように道路にまつわる話は尽きないが、シーズンを通して我々の生活になくてはならないものであり、これからも大いに、そして大切に活用していきたいものである。



● 新春所感

歴史とは記録の積み重ね

手稲郷土史研究会 会長 永井道允

皆さまにおかれましては、ご家族おそろいで爽やかな新年を迎えられたことと存じます。

世の中はものすごい速さで進化しています。AI（人工知能）が人々の仕事を奪いつつあるといわれています。まもなく、自動運転の車が走り出すそうです。遠からず、「昔、手稲に運転免許試験場という施設がありました」という時代が迫っています。私のような高齢者は、時代の流れから振り落とされてしまっているのではないかとさえ感じています。

さて、手稲郷土史研究会の事業計画として掲げたものの中に、着実に成果を上げているものがあり、関係各位のご尽力に、そして会員の皆さまのご協力に心から感謝を申し上げます。残念ながら、計画しながら停滞して成果の見えていないものもあります。まだ令和元年度は終わっていませんが、原因や方法にメスを入れ、修正をしていかねばなりません。

世の中がいかにも変わろうとも、「歴史とは記録の積み重ね」とも言えます。今後とも皆さまと力を合わせて、手稲の正確な記録を積み重ねて、後世に伝えてまいりたいと思います。ご協力をお願いいたします。

〈令和2年1月8日 定例会〉



★「勝手にしゃべり合う会」へのお誘い 手稲の歴史や自然、気になるまちのできごと、子どもの頃の思い出話など、気軽にしゃべりませんか。「定例会だけでは物足りない?!」という手稲郷土史研究会会員の声を受けて、一昨年よりフリートークの場を設けています。毎月最終水曜日、13:00～16:00、会場は「ていねコミュニティカフェ めりめろ」（手稲本町1条3丁目 メディカルスクエア 手稲2階）です。飲料等をご注文のうえ、どうぞご参加ください。

次回定例会 → 発表内容「手稲町の火事」 / 沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会員）

3月11日（水）13:30～ / 手稲区民センター3階 視聴覚室 / 当研究会の会員でない方の聴講も可